

山川均とふたりの中国人

——施復亮と巴金——

米原謙

はじめに

山川均（一八八〇—一九五八）は「山川イズム」や「労農派」の社会主義者として名高いが、その思想については、冷戦終結後、社会主義やマルクス主義への関心が遠のいて研究は多いとはいえない。しかし近年、石河康国『マルクスを日本で育てた人』（全三巻、社会評論社、二〇一四—一五年）のような詳細な評伝が刊行され、またソ連崩壊後に公開されたコミンテルン文書によって、第一次共産党の活動を精査した黒川伊織『帝国に抗する社会運動——第一次共産党の思想と運動——』（有志舎、二〇一四年）も刊行された。黒川の著作は、大正から昭和初期のマルクス主義の政治社会運動において、山川が果たした役割が従来の常識よりもはるかに大きかったことを解明している。

わたしはこうした研究動向に関心を抱きつつ、二〇一六年三月から三カ月間北京に滞在して、中国人民大学で

教育研究する機会にめぐまれた。この小論は、その機会を利用して、山川の思想が中国でどの程度受け入れられていたかを調査した結果、たまたま突き当たったふたりの中国人、施復亮と巴金について知り得たことを述べたものである。施復亮（一八九九〜一九七〇）は中国共産党創立時のメンバーでありながら、その後、離党して国民党にも共産党にも与しない「中間路線」（あるいは「中間派」）を主張した人として知られている。他方、巴金（一九〇五〜二〇〇五）は『家』『寒夜』などで日本でもよく知られた著名な文学者である。このふたりはともに日本に滞在した経験をもつが、相互に特別な接点はなく、山川との関係も異なる。施復亮は日本滞在中に山川と会い、その社会主義思想から影響を受けた。巴金の場合は、山川と会ったことはないが、盧溝橋事件の直後に山川を激しく批判することになる。こうした違いは、日本そして山川の著作との出会いの違いにも原因があった。以下では、まず山川の著作の中国語訳を手がかりに施について述べ、つぎに巴金の山川批判の小文とかれの日本体験について考察する。

第一章 施復亮と山川均

一 山川均の著作の中国語訳

一九二〇〜三〇年代の中国における社会主義思想の形成・伝播において、日本の社会主義者の著作が大きな役割を果たしたことは、すでに先行研究がある。とくに石川禎浩と三田剛史の研究は詳細で、日本の社会主義者の著作の中国語訳のリストは有益である。石川の研究によれば、山川の著作の中国語訳は単行本で刊行されただけでなく、『覚悟』（新聞『民国日報』副刊）などに掲載されたものも多い。両氏の研究成果を参考にしながら、わたし自身が確認し得たものを追加して翻訳リストを掲げておこう（参考のために原著名を記したが、多くは翻

訳の表題から原著名を推測したもので、原著と翻訳を対照したものは限られている。なお重版が出されているものもあるが、初版の発行年を記す。また日本語では未発表と推測されるものも含めている。

山川均の著作の中国語単行本

発行年	書名	訳者名	出版社名	山川の原著名
一九二〇	労働総同盟研究	鄒敬芳	泰東図書館	フランス総同盟の研究、改造、一九二〇・四〜五
一九二二	蘇維埃研究	王文俊	新知書社	ソヴィエトの研究、改造、一九二二・五
一九二二	社会経済叢刊	施存統編訳	泰東図書館	
一九二二	列寧伝	張亮	人民出版社	レーニンの生涯と事業、社会主義研究、一九二二・四
一九二二	労働露西亜研究	李達編訳	商務印書館	労働露西亜の研究、アルス、一九二二
一九二二	馬克斯経済学原理	周仏海訳	商務印書館	E・ウンターマン著・山川訳、マルクス経済学、白揚社、一九二二
一九二七	資本主義玄妙	呂一鳴	北新書局	
一九二七	資本主義社会的解剖	張我軍	青年書店	
一九二八	資本主義批判	高希聖	上海励群書店	資本主義批判、社会経済体系第一五巻掲載、日本評論社、一九二八
一九二八	資本制度浅説	施存統	国光書店	資本主義のからくり、倭友社、一九二三
一九二八	増訂資本制度解説	施存統	新東方出版社	

一九二八	弁証法浅説	劉若詩等著	現代中国社	
一九二九	弁証法與資本制度	施伏量	新生命書局	
一九二九	蘇俄之現勢	温盛光	啓智書局	八 社会主義サヴェート共和国同盟の現勢、日本評論社、一九二
一九二九	俄国革命與農民	高希聖	平凡書局	
一九二九	現代經濟学	巴克	啓智書局	
一九二九	唯物史觀經濟史 上 資本主義以前經濟史	熊得山	崑崙書店	唯物史觀經濟史（經濟学全集第三二卷）、改造社、一九二九
一九三〇	馬克斯資本論大綱	陸志青	未明社	マルクス資本論大綱、三田書房、一九一九
一九三〇	工会運動底理論與實際	施復亮、鐘復光	大江書鋪	労働組合の理論と實際、一九二九
一九三〇	現代社会講話	楊冲嶼	新新書店	
一九三〇	台湾民衆的悲哀	宋蕉農	新亞洲書局	殖民政策下の台湾、プレブス社、一九二六・二二
一九三〇	資本論大綱	傅烈	辛壘書店	
一九三三	転形期底經濟理論	施復亮、鐘復光	新生命書局	
一九三三	社会主義講話	徐懋庸	上海生活書店	社会主義講話、一九二九
一九五一	資本論大綱	傅琛	棠棣出版社	

山川均とふたりの中国人

年	論文名	訳者	掲載誌	山川の原著名
一九二〇	「薩波達拳」的研究	戴季陶	星期評論 三四	労働運動の戦術としてのサポタージユ、改造、一九一九・九
一九二二	現代文明底経済的基礎	施存統	觉悟、二月二三 〜二四日	現代文明の経済的基礎、文明批評、一九一八・一
一九二二	蘇維埃俄国底经济組織	陳国渠	国民 二一四	ソヴェト露国の经济組織、社会主義研究、一九二〇・九
一九二二	蘇維埃俄国底新農制度	陳国渠	国民 二一四	
一九二二	勞農俄国底労働連合	陳望道	新青年 八一五	勞農露国の労働組合、労働運動、一九二一・三・七
一九二二	勞農俄国底農業制度	周弘海	新青年 八一五	ソヴェエト露国の農業制度、社会主義研究、一九二一・一一
一九二二	考茨基勞農政治反对論	施存統	觉悟、四月二二 〜二九日	カウツキの勞農政治反对論、社会主義研究、一九二一・三
一九二二	由英婦俄後的克魯泡特金	鳴田抄訳	觉悟	勞農治下のクロボトキン、社会主義研究、一九二一・三
一九二二	勞農俄国底安那其主義者	施存統	觉悟、六月一日	勞農口国無政府主義の人々、社会主義研究、一九二一・五
一九二二	労働組合運動和階級闘争	光亮（施存統）	觉悟、八月一九日	
一九二二	勞農制度研究	均（李漢俊）	共產党五	
一九二二	梅雨節的日本	羅崑	觉悟	梅雨期の日本、改造、一九二一・七
一九二二	農民為什麼苦呢	Y・D	觉悟	農民はなぜ苦しいか、労働者、一九〇八・五

一九三〇	資本主義社会的批判	法学院、張逸美	社会改造第七期	
一九三〇	台湾 日本帝国主義鉄蹄下の	宋蕉農	〇・四 新東方、一九三〇・四	単行本『台湾民衆的悲哀』に同じ
一九二六	弱小民族の悲哀	張我軍	台湾民報、一〇五 五一五号	弱小民族の悲哀、改造、一九二六・五
一九二三	「新經濟政策」與俄国之将来		覚悟、五月二〇日	新經濟政策と口国の将来、改造、一九二三・四
一九二三	資本制度解説		覚悟、三月一、二〇日	
一九二三	国際労働同盟の歴史	熊得山	今日 二―三	インタナショナルの歴史、社会主義研究、一九二二・九―二 三・三
一九二三	労農俄国底建設事業	象子	晨報副鐫	
一九二三	水槽底水	長庚	覚悟	タンクの水、新社会、一九一六・六
一九二三	生育節制和新馬爾塞斯主義	平沙（陳望道）	婦女評論	産児調節と新マルサス主義、改造、一九二〇・一〇
一九二二	対於太平洋會議の我見		新青年、九―五	
一九二二	合 社会主義国家と労働組合	周仏海訳	新青年、九―二	社会主義国家と労働組合、改造、一九二二・四
一九二二	從科学的社会主義到行動的社会主義		新青年、九―一	
一九二二	奴隸和鉄鎖	晋青（謝晋青）	覚悟	

一九三二	労働組合的各種形態	北大政治学会、 劉安常訳	政治学論叢、創 刊号、一九三二 年	波多野鼎ほか共著『社会政策』（経済学全集第一八巻）改造社、 一九二九年
------	-----------	-----------------	-------------------------	--

以上のリストを一覧すると、訳者として施復亮（施存統・施復量は同一人物、ここでは研究者が多く使っている施復亮で統一する）のものが単行本が六点、雑誌掲載論文が四点あり、目立って多いことに気づく。まず施復亮の人物と思想について説明することから始めたい。施については「中間路線」問題を中心に、日本でもかなりの研究蓄積がある。⁽²⁾以下では主として石川禎浩の一連の研究と宋亞文『施復亮政治思想研究』などに依拠して、その生涯と思想について概観しよう。

二 施復亮と日本

施復亮（本名は存統）は一八九九年に浙江省金華県葉村に生まれた。杭州市の南西二〇〇キロメートルほどの地である。施氏は裕福な大家族だったが、かれの父は長子だったにもかかわらず、祖父のえこひいきのために家産を分けてもらえず、半小作農になった。幼少時の施は伝統的な教育を受け、親孝行を第一の道徳と考えていた。しかし父から虐待を受けたので、母方の援助で一九一七年に浙江省立第一師範学校に入学し、そこで『新青年』など五四運動期の新文化運動の影響をもちに受けることになる。しかも父が重篤の母の看病や医療費を惜しむのを見て憤慨し、『浙江新潮』第二号に「非孝」という文章を発表した（一九一九年。なおこの雑誌は現存しない）。若き施が書いた告白録「二二年來の我を振り返る」（『民国日報』副刊『觉悟』一九二〇年九月二〇～二四日）によれば、この論文の本来の表題は「私は絶対に不孝な息子を作らない」だったという。つまり「孝」を単なる個

人道德の問題ではなく、社会制度のレヴェルで捉えて、家族制度や私有財産制度を根本的に改革しなければならぬと訴えたのだった。「孝」は伝統的な家族制度の基本であり、新文化運動が否定した旧道德の核心だった。「孝」は人性を損なう一種の奴隷道德である」と、施は極論しているが、個人的な家庭の事情をバネにして、新文化運動の思想を激烈な形で表明したものといえるだろう。

「非孝」の反響はすさまじく、陳独秀は『新青年』誌上で「見かけだけの篤実紳士には言えない」率直な議論と評して称賛したが、他方で雑誌は禁止、校長と進歩派教員は退職という結果になった。施復亮自身も学校をやめて北京に行き、北京工読互助団に参加する。日本におけると同じく、中国でもアナキズムはマルクス主義受容以前の有力な社会主義思想で、工読互助団は「労働しながら勉強し、各人が能力を尽くして必要なものを得る」というアナキズム的な団体だった。しかし当然ながら、こうした現実から遊離した理想主義の運動はまもなく失敗に終わった。一九二〇年四月、施は上海に赴き、そこで陳独秀や戴季陶の影響でマルクス主義の洗礼を受けたらしい（戴季陶は後に国民党右派の代表的政治家になるが、この時期は社会主義に関心を寄せていた）。そして戴季陶の援助で、その年の六月に日本に留学した。前述の告白録「二二年來の我を振り返る」は、自分の半生を赤裸々に語ったもので、来日後二か月の九月一日に擲筆されている。内容はいかにも改革精神に燃えた青年らしく、末尾では「私は将来、偉人なんかになるのではなく、ただ幸福な社会作りに確実に役立つような一革命者となりたい」と書いている。日本留学に込めた意欲と抱負を述べたものだろう。

石川楨浩の研究によれば、日本で施復亮を受け入れて世話したのは、宮崎滔天・龍介親子だったという。来日当時の施は日本語が全くできなかつたはずだが、猛勉強したらしい。翌一九二一年一月から、『覚悟』誌上に、続々と日本のマルクス主義文献の翻訳を掲載し始める。とくにわれわれの注意を引くのは山川の著作である。「現

代文明の経済的基礎」(四月二二～二三日、原著は『文明批評』一九一八年一月号掲載)、「カウツキーの労農政治反対論」(四月二二～二九日、原著は『社会主義研究』一九二一年三月号掲載)、「労農口国無政府主義の人々」(六月一日、原著は『社会主義』一九二二年五月号掲載)、「労働組合運動と階級闘争」(八月一九日、原著は『社会主義国家と労働組合』、『改造』一九二二年四月号掲載)などである。

このほかに「『社会主義研究』紹介」(九月二七日)という通信記事があり、一九二二年の二月号から九月号までの目次が紹介されている。『社会主義研究』は、山川が堺利彦や山川菊栄と協力して一九二〇年五月から二三年三月まで出していた月刊雑誌であるが、施復亮はここで山川夫妻について以下のように紹介している。「山川均先生は現在日本社会主義者中でもっとも研究を積んだ第一人者である。かれは各派社会主義すべてに、とくに共産主義についてはとりわけ深く研究している。かれは最近の日本の社会主義論壇ではほば継続して活動している唯一の人で、病中であるにもかかわらず奮闘しており、実に人を敬服させる。(原文改行)山川菊栄先生は単に日本のずば抜けた女性社会主義者であるばかりか、おそらく世界でも稀有の女性社会主義者である。彼女の終始一貫した豊かな研究は、一般の人に敬服され、とくに広く社会主義者青年に敬慕されている」。文末で『改造』や『解放』を買うより、『社会主義研究』のほうがはるかにいいと絶賛しており、山川への傾倒ぶりがよくわかる。

山川は「ソヴェエト政治の特質と批判」(『社会主義研究』一九二〇年六月)以来、当時の日本でロシア革命と労農ソヴェエトについて、最先端のまとまった研究を発表し始めていた。施はいち早くそこに目をつけたのである。上記の翻訳のなかでは、とくに「カウツキーの労農政治反対論」が注目される。この論文はカウツキーによるプロレタリアート独裁批判の書『プロレタリアートの独裁』の一部分を翻訳して、それに山川が批判的な注釈を付けたものである。山川の注の大半はレーニン『プロレタリア革命と背教者カウツキー』に依拠しており、プ

ロレタリア独裁を擁護してカウツキーを批判する内容である。施は山川らの研究をつうじてロシア革命とマルクス主義の知識を深め、中国での社会主義革命の可能性について考察していた。かれが『覚悟』に掲載した「唯物史観の中国での応用」（九月八日）、「マルクス主義の特色」（九月二三日）、「マルクス主義に関するひとつの誤解」（九月二六日）などはいずれも決して高度な内容ではないが、かれの思考の跡を示すものである。

一九二一年当時の山川はすでに日本におけるマルクス主義の第一人者だったが、アナキズムへの共感を失っていなかった。施復亮もすでに来日以前からマルクス主義への傾斜を強めていたが、アナキズムとの関係が切れていたわけではなかったらしい。上海のアナキズム雑誌『自由』に日本通信所として「存統」の名前が挙げられていたことから、日本の公安当局が施復亮の存在を知り、かれの動向を逐一把握していたことは、石川禎浩が外交史料館所蔵資料などにもとづいて詳細に追跡している。⁽⁴⁾ そのごく一部分をここに摘記してみよう。

警察庁が施の存在を察知したのは一九二一年一月だったらしい。一月一〇日付の「無政府主義者宣伝雑誌「自由」ノ通信者ニ関スル件」と題された書類には、前記の雑誌『自由』の日本通信所として「東京府高田村一五五六、三崎館存統」と明記された人物は、「東京同文書院ニ在学傍常ニ宮崎滔天方ニ出入シ」ている「施存統」に違いないとしたうえで、以下のように報告している。⁽³⁾ 「存統ハ「非孝」ト題スル出版物ニ孝ハ一種ノ奴隷道德ニシテ孝子ハ奴隷ノ別名ナリ忠ハ専制君主ガ政策上利用シタルモノニ過キササルモノナリトノ極端ナル儒教排斥忠孝否認論ヲ掲ケ以テ之ガ宣伝ニ努メツ、アルモノナリ」。さらに四月二三日付の報告では、施が李漢俊（東京帝大出身で当時は中国共産黨員）とともに「我国社会主義者堺利彦、高津正道、山崎今朝彌ト交通シ彼等ノ著述ニ係ル同主義宣伝雑誌其ノ他ノ印刷物等ヲ翻訳ノ上支那内地人ニ紹介シ居ル疑ヒ」があると指摘している。堺利彦と高津正道は山川とともに、間もなく結成される日本共産党準備委員会のメンバーであり、山崎今朝彌は前述の雑誌『社

会主義研究』の編集人もしていた弁護士で、山川均と非常に近い関係にあった。

施復亮の書簡は公安当局によって開封されていた。五月二〇日付の報告では、前月二八日鹿児島局消印の周海から施あての書簡が翻訳されている。そこには「(前略) 四月ノ改造ハ発売禁止トナレルモ僕ハ彼皆得タリ中山川均ノ社会主義ト国家ト労働組合アリ僕ハ之ヲ翻訳シテ新青年ニ登載セリ(下略)」とある。周佛海はのちに国民党右派に属し、最後は汪兆銘政権の中枢を担って「漢奸」として処刑されたが、この頃は施とともに中国共産党創設期の「日本グループ」を構成していた。⁶⁾この書簡のとおり、山川の「社会主義国家と労働組合」は『新青年』九卷二号(一九二一年六月)に掲載されている。

施復亮はすでに六月の段階で、公安当局の尋問を受けていた。六月一八日付の報告によると、かれは「当地日本人中ニテ宮崎龍介以外一人ノ交友ナシ(中略) 日本社会主義者トハ交通セシコト一回モナシ」と答えたらしい。日本の社会主義者に累が及ぶことを恐れて、事実を隠したのだろう。どうやら、日本の公安当局が自分の送受信する書簡をすべて開封しているとは、思いもよらなかつたらしい。「最近警察ハ余ニ追尾シ余ノ一挙一動ヲ束縛スルコト甚タシ奇怪ニ堪ヘス(後略)」として、宮崎龍介に警察への陳弁を願ひ出たようだ。

施復亮の日本での活動はたんに社会主義思想の研究や中国への紹介にとどまるものではなかつた。中国共産党が正式に結成(第一次全国代表大会開催)されたのは、滞日中の一九二一年七月のことで、かれはその動きをつぶさに承知していて、相談のうえで周佛海が日本からの代表として出席した。共産党結成の背景には、当然ながらコミンテルンの支援があり、日本における共産党結成の動きとも連動していた。日本にいた施復亮は、コミンテルン・中国共産党・日本共産党(四月に準備委員会が成立)⁷⁾の三つの動きが交差した点に位置していた以上、かれが公安当局の摘発を免れるのは難しかつたらう。

施復亮が逮捕されたのはこの年（一九二二年）二月二〇日である。警視庁の取り調べで、施は以下のように供述している。「余が今日迄交通したる日本社会主義者は堺利彦、高津正道、井伊敬（近藤栄蔵の別号にして羅馬綴の頭文字 E・K より転訛したるもの）、宮崎龍介、山川均、高瀬清等なり。（中略）山川均とは昨年「一九二一年」九月頃、友人唐伯焜と同道彼の私宅を訪ひ、後雑誌『改造』に搭載せられし同人の論文中の抹殺されたる〇〇に就き訪問、最後は十一月か十二月初旬頃、鹿児島に在る周佛海が上海に行きたる際、同地露国過激派の袖領 S (Semeshko?) より山川宛に信書を預り来りたるも、周の都合に依り上京し得ざる關係上、其交付を余に依頼し来りたるを以て、該書簡を山川方に持参せり。（原文改行）其時山川は余に『君も承知の通り今回多くの日本社会主義者が起訴せられイルクーツクより来たれる日本人代表も亦起訴せられたるを以て此事を上海の君の友人より目下上海に在るイルクーツク代表日本人に通知し、帰国せぬ様御配慮を煩はし度し』と謂へり。其日本人は當時は記憶し居たるも、今は失念せり」⁸。

十二月二七日、施復亮に対して日本からの追放処分という内務大臣命令が出された。翌日の各新聞は施の国外追放について報じている。やや詳細な『都新聞』から引用してみよう。「（前略）社会主義者施存統は、警視庁武藤係長が十日間に亘り取調べの結果、過般退去命令を受けたグレーと間接に關係を持ち、我が安寧秩序を乱す惧れありとして、日比谷署に拘留中だったが、二十七日内務大臣は退去命令を發したれば、二十九日横浜港出帆の大阪商船アリゾナ丸で上海へ向け退去の筈である。同人は（中略）支那に於ける社会主義者の首領株にて上海共產党の陳独秀一味に属し、同時に上海の社会主義大学の代表者として日本に渡来し、社会主義の研究調査に努め、仏米等に散在せる党员と通信し、社会主義者近藤栄蔵、高瀬清、高津正道等と連絡を取り、堺利彦、山川均諸氏等と交際し、モスコウ政府より資金を受けて、宣伝に着手せんとした者で（下略）」。

この報道のとおり、施は二九日横浜発で、神戸・門司に寄港して上海に帰国した。一月五日に門司に寄港した際に臨検した刑事は以下のように報告している。「本人ハ船室ニアリテハ（労働ノ未来ト現在）ト題スル書籍ヲ繕読シ時ニ甲板ヲ逍遙スル事アルモ何等異状ノ言動ナク翌六日正午同船ニテ上海ニ向ケ」出発した。⁽⁹⁾

ところで先に引用した『都新聞』では「グレーと間接に關係」を持ったことが、施の国外退去の理由とされている。石川『中国共産党成立史』によれば、「グレー」とはボリス・グレイ (Boris P. Gray) という人物で、日本の共産主義運動の資金を持って上海から横浜に渡来したが、警視庁にいち早く察知されて国外退去になったものである。「特別要視察人状勢調」（大正十年度）は、その事情を以下のように記述している。「甲号近藤栄蔵ヲ首領トスル日本共産党ニ於テハ十一月十二日、要注意人物重田要一二報告書及赤化宣言費予算書ヲ携帯セシメ、在上海露国労働政府宣伝部支局ニ派遣シタル事実アルヲ察知シタルガ、更ニ越ヘテ同月二十四日、重田ハ其ノ使命ヲ果シ同宣伝部員「ビー、グレー」ト相携ヘテ帰国シ、「グレー」横浜ニ滞在シ携帯シ来リタル宣伝費ヲ日本共産党員ニ交付スベク先ヅ甲号山川均等ト会见スベキ手筈トナリ居ルヲ探知シタルヨリ、彼等ノ会见ニ先チ翌二十五日早朝神奈川県警察部ニ通報スルト共ニ庁員ヲ急派シ協力シテ「グレー」ヲ取調タルニ、彼ハ約金七千円（五千円ハ台湾銀行小切手、其他ハ現金）ヲ所持シ「チタ」ヨリ上海ニ来リ、（中略）「グレー」ハ労働政府ノ密使トシテ日本共産党ト連絡ヲ執ランガ為メニ渡日シタルコト明瞭（後略）⁽¹⁰⁾」。

「特別要視察人」は甲乙の二種類に分類され、主要人物は「甲号」とされていた。この文書で「日本共産党」の「首領」とされた近藤栄蔵（一八八三—一九六五）は米国帰りの社会主義者で、第一次日本共産党の主要メンバーとしてコミンテルンとの連絡などで活躍した人物として知られている。一九二一年六月から七月にかけてモスクワで開催されたコミンテルン第三回世界大会には、日本から誰も出席しなかったが、同年一月にイルクーツ

クで極東諸民族大会が開催されることになって、その連絡のために中国人の張太雷が一〇月に来日した（実際はモスクワで二二年一月開催）。張がこの任務のために頼ったのは施復亮で、石川が紹介している東京地裁での供述によれば、施は張を堺利彦に紹介し、堺が近藤を呼んで協議したという。⁽¹¹⁾先に引用した施の供述書で、一月末から一二月初旬に最後に山川に会ったとき、イルクーツクに行った日本人が帰国しないように伝言してほしいと言われたとあるが、これはこの極東諸民族大会に出席するために出国していた日本人のことであろう。グレーの事件や後述の「暁民共産党」事件で、多数の活動家が逮捕されていたので、帰国すれば連累をまぬかれないと警告したものである。

ところで先に引用した『都新聞』の記事に、「社会主義者近藤栄蔵、高瀬清、高津正道等と連絡」をとったとされているが、かれらは暁民会（あるいは暁民共産主義団）という組織のメンバーだった。⁽¹²⁾犬丸義一によれば、暁民会は「日本共産党準備委員会の細胞的役割」を持つ組織で、結成されたのは一九二〇年五月だったという。⁽¹³⁾この暁民会は翌年一二月、陸軍特別大演習に参加する部隊の宿舎に「軍人諸君！ 兄弟よ！」と「軍人諸君！」と題する二種類のビラを郵送・配布して、近藤・高瀬・高津などのメンバーが逮捕された。「日本は幾度か戦争をした。そして、いつも君等の「忠君愛国」によって、君等の仲間の貴い命と、君等の親兄弟姉妹妻子の幸福とを犠牲に供して、大勝利を得た」などと反戦反軍的な考えを説いたものである。ビラの末尾に「共産党本部」と記されていたこともあってか、一般に「暁民共産党」事件と呼ばれている。⁽¹⁴⁾以上のように、施の日本滞在は日本共産党結成の準備期とかさなり、中国共産党結成と密接な結びつきがあった施は、必然的にこうした動きの渦中に置かれた。

三 帰国後の施復亮

こうして施復亮の日本滞在は、かれの意に反して一年六か月で終わった。帰国した施は、当時活動停止状態だった社会主義青年団の再建の責任者となり、翌一九二二年五月、団の第一回全国代表大会で中央書記に就任して、実践活動に入るようになった。しかし病弱だった施は翌二三年秋に上海大学で教鞭をとることになる。上海大学は私立東南高等専科師範学校を改組したもので、名義上は国共合作での運営だったが、実質は共産党が主導した幹部養成学校だったという。⁽¹⁶⁾一九二六年、施は国民党の中心地である広州の中山大学校長に就任し、さらに翌二七年には武漢の中央軍事政治学校の教官となった。かれが所属した政治部は共産党の牙城だったという。⁽¹⁶⁾このような経歴からすれば、施が共産党内で着実に活動を続けていたようにみえる。しかし施は共産党の中核部分に身を置きながら、他方で一九二二年後半に戴季陶・胡漢民・陳樹人の紹介で国民党にも加入して、国共合作が実現する前から「跨党党员」になっており、二七年八月に共産党を離党するとの声明を発表する。

施復亮の唐突な行動の契機になったのは、上海における蒋介石の反共クーデタ（二七年四月）である。武漢国民政府はクーデタに対抗して、蒋介石を罷免し討伐を宣言したが、他方、蒋介石は南京に新たに国民政府を樹立したので、国共合作は崩壊した（七月）。その間に共産党は急進化の度合を強め、農村で土地革命を実行して、江西に根拠地を作ることになる。施は五月から武漢を防衛する軍事行動のために農村に行き、そうした動きをつぶさに見聞することになった。八月三〇日付の『中央日報』副刊に発表された「悲痛な中での自白」は、共産党の看板では「どうしても大衆の中に深く入ることができない」とし、当面の課題である国民革命の遂行のためには国民党左派によって革命の指導権を統一する必要があると述べている。⁽¹⁷⁾つまり国民革命は、無産階級という単一の階級ではなく、労働者・農民・小ブルジョワジーを代表し、「国際的平等」「政治的平等」「経済的平等」という

「非資本主義的三民主義」の実現をめざす国民党よつてのみ実現できるといふ。そこにはコミンテルンの支部である共産党よりも、中国人の独立した組織である国民党のほうが、中国の自由と独立を実現するのに適切だと判断もあつただらう。⁽¹⁸⁾

以上のような施の言動は、山川と不思議な照応関係がある。山川が有名な「無産階級運動の方向転換」を發表したのは『前衛』一九二二年七月・八月号であり、あたかも施が戴季陶から国民党加入を勧められた時だつた。山川の主張はあきらかにコミンテルン第三回大会の「テーゼ」を受けたもので、同じ時期に、かれは改良主義者や中間派との「協同戦線」を主張し、小ブルジョアを無産階級のほうに引きつける必要を説いた。⁽¹⁹⁾ さらに一九二四年になると普通選挙の実施をふまえた議論を展開し、例えば「無産階級政党の諸問題」では、前衛党ではなく、公然たる議論にもとづく大衆的な運動体が必要だと説くにいたる。こうした主張はその後さらに明確化され、資本主義的な秩序に反対するすべての要素を結合し、小ブルジョアの利害をも包含するような「共同戦線党」を提唱する。山川がこうした主張を明確に前面にうち出すのは『労農』創刊号（一九二七年二月）に發表された「政治的統一戦線へ！」だが、それは一九二六年末に再建された日本共産党との対決を明示したものとといえる。

前述のように、施は二七年八月に共産党離脱を告白するが、それは共産党の暴力路線を批判する一方で、「少数軍人の私有品」⁽²⁰⁾ になりさがつた国民党を改革するという主張にもとづくものだつた。そこには、中国は帝国主義下の半植民地であり、ブルジョア階級も無産階級も十分に発達する余地はないこと、したがつて中国革命はフランス革命ともロシア革命とも異なつた道を歩み、労働者・農民・都市小ブルジョアによる「全中国の一切の被圧迫民衆共同の党」⁽²¹⁾ による民権革命を遂行すべきだとの認識がある。民権革命（ブルジョア民主主義）を実現していく過程が、結果的に三民主義のいう民族・民権・民生（社会主義）の三つの革命を並行的に実現することにつ

ながると考えたのである。同じころ山川は、ロシア革命はロシア独特の革命方式であり、日本では労働者・農民・小ブルジョア下層による「共同戦線党」によって政治的自由を拡大していくことが、社会主義革命への道を切り拓くことになると考えていた。山川と施は、一九二七ころに酷似した観点に到達していたのである。⁽²²⁾施は、あるいは山川の議論の展開をある程度知っていたかもしれない。しかしそれはせいぜい山川から示唆を受けたという程度であり、蒋介石による自由の剥奪やテロ、共産党の暴力革命論の両端から挟撃される形だった施が、孫文の三民主義を基礎に独自に考え出した構想だったのだろう。

第二章 山川均と巴金

一 通州事件と山川均

巴金が山川均を激しく批判するのは、一九三七年の盧溝橋事件直後に起こった通州事件を契機にしている。まずこの事件について述べよう。通州は北京から一五キロメートルほど東にある町で、当時は冀東防共自治政府の所在地だった（現在は北京市通州区、北京市中心部から地下鉄八通線が通っている）。「冀」は河北省（北京の周囲）の別名で、「冀東」は河北省の東部地域のことである。日本軍は、一九三五年ころから、華北地域を中華民国政府から切り離して日本の影響下に置く政策をとっていた。冀東防共自治政府はその具体的な現われで、いわば日本の傀儡政権である。一九三七年七月七日、盧溝橋で日中両軍が武力衝突すると、この地域にも軍事的緊張が生じた。冀東自治政府には、義和団事件の結果として締結された北京議定書（一九〇一年）を根拠に日本の支那駐屯軍の一部が駐屯していたが、治安の主力は中国兵からなる保安隊だった。自治政府のトップは親日派と目された殷汝耕で、保安隊もその支配下にあったが、この保安隊が七月二九日に反乱を起こし、多数の日本人居留民

を虐殺したのが通州事件である。反乱の直接原因は、前日、日本軍の飛行機があやまって保安隊に爆弾を落とし、たことだといわれる。⁽²³⁾ 盧溝橋事件を契機に、中国の官民のなかに鬱勃として広まった抗日意識が暴発したものである。

日本人虐殺の報道は七月三一日から日本の新聞紙上にあらわれ、八月三日には杉山陸相が貴族院本会議で事件について報告した。同時におこなわれた陸軍省の説明は以下のように述べている。「(前略) 敵はわが居留民に対し言語に絶する暴虐なる行動を取てし、その大部分を城内外に拉致し虐殺し、その残忍な行為はまことに耳目を蔽はしめるものがあつた(後略)」「(大阪毎日新聞) 八月四日付」。事件の犠牲者は二百数十名におよび、新聞各紙は号外をだして事件を報道した。そこには「凄惨を極む虐殺の跡」(『東京朝日新聞』八月四日付)、「放火、掠奪、鬼畜の支那兵」(『大阪毎日新聞』八月四日付)などの見出しが躍っている。

こうした社会的雰囲気の中で書かれたのが山川の「支那軍の鬼畜性」で、『改造』九月号に発表された。全文五〇〇字余の小文で、前半では事件の残酷さを「鬼畜性」と表現して、それが国民政府の抗日教育の結果だという報道を紹介し、後半で以下のように述べる。

「文化人を一皮剥けば鬼畜が出る。文化人は文化した鬼畜にすぎない。支那の抗日読本にも、日本人の鼻に針金を通せと書いてあるわけではない。しかし人間の一皮下にかくれている鬼畜を排外主義と国民感情で煽動すると、鼻の孔に針金を通させることになる。(原文改行) 通州事件の残酷性と鬼畜性に戦慄する人々には、むやみに国民感情を排外主義の方向に扇動し刺戟することの危険の前に戦慄せざるを得ないだろう。支那国民政府のそういう危険な政策が、通州事件の直接の原因であり、同時に北支事変の究極の原因だと認められているのだから」

(14) (24)。

山川はここで日本の新聞報道とその背後にある日本政府の説明を、徹底して自分の議論の盾に取っている。国民政府の抗日政策を批判し是正を求めたのは日本政府であり、日本人の虐殺という「鬼畜に等しい」行為は、国民政府の排外主義的で煽動的な抗日政策の結果だと、新聞などが非難していた。たとえば通州事件直前の第七一特別議会で、近衛文麿首相は「支那政府ならびに国民の自省自律」を求めていたし、広田弘毅外相は「近來殊に抗日精神の昂揚甚だし（い）」中国の現状を批判して「日滿支三国の融和提携」によって東亜が安定するとした。また香月清司^{かつき}支那駐屯軍司令官は八月一日のラジオ放送で、増長した中国軍の「天人俱に許さざる没義道の行為」を批判して「明朗北支の建設」を誓った。

国民政府の煽動的な抗日政策に対する批判は、立場を変えれば、扇情的な報道で政府の主導する「挙国一致」を後押ししている日本の言論機関への批判となる。「支那軍の鬼畜性」発表の同月に出された『文芸春秋』九月号に、山川は「特別議会は何を与えたか」を発表している。近衛内閣の下で実現した「挙国一致」「国論統一」を「ハイル・ヒトラー」を合唱するナチズムと同轍だと批判したものである。山川はここで「新聞がいまや遺憾なく挙国一致の体制を整えたことは、人々の見るとおりであるが、言論機関としての任務の方は、果して尽し終られて遺憾がないだろうか」(14二三五)と遠慮がちに反問し、報道機関の現状を「強い言葉の競り売り」によって政府に追隨していると批判したのである。

「支那軍の鬼畜性」の発表の翌一〇月、山川は『文芸春秋』のために「着弾圏外」という論説を執筆したが、原稿は掲載されないままボツになった。山川はここで国民の生活や国論が「一色に塗りつぶされている」と指摘する。「新聞をひろげてみると、そこには武威赫々たる皇軍進出の戦報と、武勇談と、かいがいしい国民統後の活動、献金美談のほかには、殆んどなんにもない」(14二四二)。ラジオ放送も芸術もキリスト教会も、すべてが

「戦争目的のために動員」されており、「人間の頭脳をも、ただ一色に塗りつぶして統制」されて、全社会が「戦時色」になっているという。さらに山川は、中国との戦争は抗日的な政権を打倒するための自衛の戦争だという日本の主張は、ドイツとイタリア以外、世界ではまったく承認されていないこと、それは軍や報道機関が主張するような「嘘つき支那」の「宣伝上手」によるものではないと示唆する。そして「日の丸の旗を振って日本軍を歓迎する支那人」(⑭二四九)という自分に都合のいい側面(「明朗北支」)だけでなく、銃をとって祖国に殉じた上海の女子学生がいた(「陰惨な支那」)ことにも目を向け、独善的な態度を改めるべきだと主張するのである。

以上のように、同時期の山川の論説を参照しながら「支那軍の鬼畜性」をていねいに読めば、かれの意図がどこにあったかは疑問の余地がない。かれの批判は通州事件の「鬼畜性」ではなく、日本軍と報道機関の排外主義的な煽動に向けられており、それがいずれ日本人の「鬼畜性」をも呼び起こす危険性があることを指摘したものである。深読みすれば、それは数カ月後の南京事件を予示したものになっているのである。

しかしこうした理解をするには、日本国内において言論の制約を体感し、山川の常套の表現テクニクを知悉している必要がある。山川の真意は「むやみに国民感情を排外主義の方向に扇動し刺戟することの危険の前に戦慄せざるを得ないだろう」という一文に込められているが、この部分を重視しないで全体を読み飛ばせば、事件の「鬼畜性」を強調し、中国人を非難したものと解釈される可能性があった。戦時色に染められた当時の日本という特殊な言論空間の外側にいる読者が、山川の文章をごく素直に読んだら、「鬼畜性」という批判に強く印象づけられたとしても無理はない。

二 巴金の山川批判

そのような線で山川の文章を理解し激しく反発したのが、『家』『寒夜』などの小説で知られる中国の作家・巴金の「山川均先生に」（給山川均先生）である。巴金の文章が最初に載ったのは上海で発行されていた雑誌『烽火』第四号で、表紙に九月二六日刊と印字されている。この雑誌は編集人・茅盾、発行人・巴金なので、巴金は山川の論説を読んで間もない九月一九日に反論を執筆して、自分の雑誌に発表したのだろう。ただし第四号に掲載されているのは全体の三分の二ほどで、残りはおそらく次号に掲載された（未見）。さらに同じ文章は全文がすでに別の雑誌『国聞週報』第一四卷第四〇号に転載されている（一〇月一八日刊）。

戦前の日本では、巴金の山川批判が知られることはなかったと思われる。戦後は、雑誌『中国』（一九六七年一月二号、特集・日本の社会主義者と中国）が、『巴金選集』（一九五一年）収録の「山川均先生に」を板倉照平の翻訳で採録して話題になった（採録された巴金の文章には前記の元の雑誌論文にはない記述が一部含まれているが、以下の叙述では板倉の翻訳を参照した）。

巴金の主張は明快である。「科学的社会主義者」であるはずの山川は、日本の新聞記者以上の激しい言葉で中国人を「鬼畜」と非難した。しかし通州の保安隊の行方は、二年にわたる「皇軍」と日本の官民の支配の屈辱に耐えかね、「悲憤の炎」を燃え上がらせたものである。抑圧された民衆が征服者に反抗するとき、少数の無辜の者が巻き添えになるのは避けがたい。ましてそこで犠牲になった人々は従来からそこで権柄をふるい、おまけに「その大半はヒロインを売りモルヒネを注射し特殊工作をしていた人たち」だった。巴金は山川にむかつて以下のようについて。「あなたは社会主義者でありながら、貴国の新聞記者の尻馬に乗って、「悪罵と欺瞞と中傷の言葉をもって、人々の偏狭な愛国心に訴えているのです」。あなたは、自分から進んでの貴国の軍閥のわなに落ちてしまっ

たのです」。

盧溝橋事件の後、戦争不拡大の動きがなかったわけではないが、軍部（特に陸軍）の強硬派がこうした動きをことごとくつぶしてしまった。また近衛文磨首相もそれを抑止する力はなく、既成事実を容認して事態を悪化させることになった。国民党は江西省廬山で会議を招集し、七月一七日に蒋介石が有名な「最後の関頭」演説をおこなった。「われわれは、弱国である以上、もし最後の関頭に直面すれば、国家の生存をはかるため全民族の生命を賭すだけのことである。そのときには、もはやわれわれは中途で妥協することは許されない。中途での妥協の条件としては、全面的投降・全面的滅亡の条件しかないからである」と、徹底抗戦を国民に訴えたものだった。⁽²⁵⁾これは蒋介石一人の決意だったのではない。国民のあいだの抗日意識の高まりが蒋介石をしてこうした発言をさせたのだった。

華北での日中の衝突は、八月一三日について上海での両軍の全面戦争に拡大した。巴金がこの文章を書いたとき、上海はすでに日中両軍の激しい戦闘の渦中にあった。巴金は冒頭でその様子を以下のように描出している。「夜は静まりかえり、すべてのものが暗闇のなかに落ち込んでしまったかのようなようだ。重砲の音がだしぬけに殷々と響き始めたかと思うと、その後すぐ、ひとしきり機関銃の発射音がした。私の部屋もかすかに振動している」。こうした状況を背景に、巴金は日本軍が上海周辺でおこなった空爆で多数の難民が殺害された事実⁽²⁶⁾に言及し、通州事件の残酷性は日本軍による「冷静な謀殺」に比べれば「十分の一」にも及ばないという。そして最後に「真実のニュースや正確な報道とはいっさい無関係な」日本の新聞の態度を以下のように要約している。「自己の民族の偉大さをひけらかし、他の民族の欠点をあばき立て、捏造した事実と扇動的な言辞を用いて、民族間の悪感情を挑発して、（中略）侵略戦争を鼓舞する。およそこれが貴国の新聞の唯一の任務であるようだ」。

すでに述べたように、山川の「支那軍の鬼畜性」の真意は、まさに巴金が言及した日本の新聞の独善的で煽動的な報道姿勢を批判し、「文化」を誇る日本人のなかに潜在する「鬼畜性」をえぐり出すことだった。つまり両者の意図はほとんど一致していた。しかし山川は日本の新聞報道を盾に中国軍の野蛮さ・残酷さを批判し、同じ行為が中国の報道では賞賛されていると指摘する。そしてこの両者の対照をつうじて、日本軍の独善性と潜在的な「鬼畜性」を透視する形をとっている。山川の文章には多重の偽装が施されており、注意深い読者でなければ、その意図が読みとれない構造になっていた。日本軍の砲撃下にあった上海で、多数の中国人死傷者のことを見聞していた巴金が、山川の真意を読みとれなかったのは無理もないだろう。

他方、山川の方は追いつめられていた。いわゆる労農派の機関誌『労農』は一九三二年五月号を最後に廃刊となり、かわりに『前進』が発刊されたが、発禁がかさなって、翌三三年七月号が終刊となった。以後、山川は『改造』『中央公論』『文芸春秋』など多様な商業メディアに評論を発表しているが、他方では執筆以外の手段での生計を模索するようになる。一九三二年初めにはイタチの飼育を始めたが、これは失敗に終わったらしい。三年には本屋か薬屋の開業を真剣に検討していたが、結局、鶉うずの飼育を始めた。いわば後退戦のなかで、商業誌での政治評論で限定的な闘いをくり広げていたのである。巴金の議論は中国のメディアで大手を振って発表でき、読者の喝采を浴びるものだったが、山川は慎重な物言いではしか真意を表現できなかった。両者は不幸な出会いをしたといえる。相互に対立する熱狂的なナシヨナリズムを背景にしたふたつの言論空間では、いつの時代にも起こりうることである。

三 巴金と日本

巴金（本名・李堯棠）は一九〇四年に四川省成都で生まれた⁽²⁶⁾。生家の李家は代々官吏をつとめる名門で、四代の親族が同居する「四生同堂」を理想とする祖父のもとで、三代の大家族約五〇人が、約五〇人の奴僕とともに広大な屋敷に同居していたという。巴金はこの大家族の本家の三男だった。巴金の初期の小説『家』はその生家をモデルにして、封建的で時代遅れな「家」の欺瞞と非人間性を激しく告発したものである。小説の終末で祖父が死去し、その祖父に象徴される大家族がいずれ崩壊していくことが示唆され、巴金自身を体現する主人公の高覺慧は「家」に反逆して上海に旅立っていく。覺慧の行動のバネになるのは、『新青年』など五四運動期の新思想の媒体となった雑誌であることからわかるように、巴金は五四運動後の新世代を象徴する典型的知識人のひとりである。小説の高覺慧と同様に、巴金は一九二三年四月に次兄とともに上海に出て中学に入学したが、一二月によりレヴェルが高い南京の東南大学付属中学校に転学した。そしてそこを二五年に卒業した後、北京大学に入学しようとしたが、健康上の問題があって果たせず、一九二七年初めにフランスに留学する。

フランス留学の理由は分明ではないが、この時期の中国の社会運動のひとつとして、留法勤工儉学運動というものがあった⁽²⁷⁾。フランス（法国）に留学して労働しながら儉約して学ぶという運動で、多くの中国人青年が渡仏した。当初、この運動の中心だったのは李石曾（一八八一—一九七三）や呉稚暉（一八六五—一九五三）などのアナキストだったが、渡仏した青年たちによって中国共産党フランス支部が結成され、周恩来や鄧小平などの共産主義者が輩出した。巴金は成都にいた少年時代からクロポトキンに傾倒していたとされ、中学卒業後にはアナキズムに関する文章も書いているので、フランス留学もこの運動の影響と想像してよいだろう⁽²⁸⁾。

巴金は一九二九年にフランスから帰国し、作家としての活動を始めた。前述の『家』はこの時期に書かれたも

のである。一九三四年一月、巴金は日本にやって来た。²⁹ 満州事変後のことで、日中関係がますます険しくなっていた時期である。来日の目的ははっきりしないが、送別会には魯迅も出席していたという。巴金はまず友人から紹介された横浜の武田武雄という人物の家に下宿した。武田は東京外国語学校支那語部貿易科の出身で、巴金の来日当時は横浜高等商業学校（現横浜国立大学の前身のひとつ）の教師だったという。武田は日蓮宗の熱心な信徒だったらしく、毎朝、読経と木魚の音が聞こえた。無神論者の巴金はそれをひどく嫌い、翌年三月に東京の中華基督教青年会の宿舎に引っ越した。

横浜での単調な生活とは異なり、東京では様々な人と交わったらしいが、四月になって忘れられない事件が起こった。満州国皇帝・溥儀の来日を翌日に控えた四月五日の深夜、熟睡していた巴金の部屋に五人の私服刑事が踏み込んで家宅捜索をした。そして何も特別なものがなかったにもかかわらず、巴金は神田区警察署に拘引され、三畳の部屋に七人が詰め込まれ、足を伸ばすことすらできない状態で一夜を過ごして、翌日午後四時にやっと釈放されたという。「山川均先生に」には、以下の一節がある。「二年前、わたしの友人が貴国の牛込警察署で、貴国の当局の措置が文明人らしくない行為だと訴えたところ、貴国の「刑事」の殴打を受けた」。拘引された警察署の名前は異なるが、おそらく巴金自身の体験が反映していると見てよいだろう。こうした不愉快な事件によって、巴金は弱小国家の悲哀を痛感するとともに、中国人としての自覚を強めたという。結局、巴金は滞在わずか一〇か月ほどで、八月に帰国した。

四 巴金「日本の友人に」

前述のように、盧溝橋事件（一九三七年七月七日）の二か月ほど後に巴金が書いた「山川均先生に」は、戦後

の日本で取りあげられたことがある。しかし「山川均先生に」のすぐ後に執筆された「日本の友人に」（給日本友人）はあまり知られていないようである。この小文は現在『巴金文集』（第一〇巻、人民文学出版社、一九六一年）に採録されているが、わたしが実物で確認した初出誌は、「山川均先生に」と同じく『烽火』⁽³⁰⁾である。「山川均先生に」と同様に、日本軍の攻撃下にある上海で執筆されたもので、日本の友人「武田君」に宛てた形になっている。いうまでもなく「武田君」とは巴金が横浜で下宿した武田武雄を指している。巴金は武田に敬意を持っていたとはいえないが、それでも滞日中にかれがもつとも親しくした日本人は武田だったのだろう。この文は、武田に代表される日本の知識人に対して、日本軍の中国侵略の実情を伝え、真実を見るように訴えたものである。内容をごく簡単に紹介しよう。

「早朝ベッドで目覚めると、すぐに爆弾がさく裂する音が聞こえた。あなたたちの空軍兵士が防衛能力のない難民と無防備の都市を爆撃しているのだ。かれらはどんな気違いじみた力を駆使してこんなことをするのだろう。平和な人民を屠殺する権力を、誰がかれらに与えたのだろう。全世界の良心が一致してこんな罪悪を非難しているにもかかわらず、あなたたちはそれを支持している。あなたたちはこの罪悪を増幅させている」。巴金は日本人には「分に安んじ己を守る」という欠点があるという。そのために統治者が国民の名においておこなう非行に目をつぶり、簡単にペテンにかけられてしまう。統治者を崇拜し、上司を信じ、教師のいうことを絶対の真理とし、新聞を生活の指針とする。その結果、頭のなかは誤った観念と虚偽の情報で満たされ、世の中を知らないの、完全に操り人形になってしまつて、甘んじて野心家の利用されるがままである。

ここで巴金は一九三五年正月の武田家でのエピソードを例に挙げている。武者小路実篤に傾倒していた中国人が日本軍の満州侵略を批判しているのを読んで、武田が来客ともども憤慨していたというのだ。その中国人は、

中国の友人を自称していた武者小路が、人類の繁栄に危害を与える野蛮勢力を非難すると期待していた。しかし武者小路は考えを変えて「山川均や林房雄の後に続いて軍閥や政客の提灯もちになってしまった。武者小路氏すらこんなひどい状態に変わってしまったのだから、自由主義者の室伏高信が軍閥の爪牙となって、「早く中国に戦勝しなければ駄目だ」と高唱するのは何の不思議もない」。要するに日本の知識人は、新聞報道を盲信し、軍閥に盲従して、自らの理性で物事を判断しようとしなない。だから「あなた方が知っているのは、ただ貴国の「皇軍」がああ廃墟で世界に向かって軍事的勝利を誇っていることだけです」。この文章の末尾で、巴金は助けや同情を求めているのではないと断わって、以下のように述べる。「わたしが要求しているのは、あなたとあなたの同胞たちが反省して、人類の繁栄を破壊しているあの暴力を、われわれと共同で壊滅することに努めるようになることである」。

厳しい批判であるが、巴金が日本軍の爆撃のなかでこれを書いたことを思えば、むしろ抑制された筆致といへばかもしれない。想定された読者は中国の知識人だから、いたずらに敵意を燃やしナショナリズムを刺激するより、日本社会の現状を批判することで日本の良識に訴えるという形をとったともいえる。山川は軍部の提灯もちとして第一に檜玉にあげられているが、これは中国の社会主義にたいするかれの影響の大きさの反映でもあるだろう。

おわりに

以上、山川均の思想の中国での受容や影響を調べていて、偶然に行きあつた二人の中国人について述べた。本文中で述べたように、施復亮については日本でもかなりの研究が公表されているが、管見のかぎりでは、帰国後

の施と山川の思想との照応関係に関心を向けた人はいないようだ。巴金の山川批判については、雑誌『中国』で取りあげられたことがあるが、その取りあげかたは山川が置かれた事情やかれの同時期の言論を考慮したものはなかった。

「支那軍の鬼畜性」の三カ月後に、山川は人民戦線事件で逮捕され、一九四五年八月まで完全に言論の自由を失う。山川は特異な社会状況に置かれ、自分の言論が海の向こうでどのように理解されるかまでは考慮できなかった。巴金は不幸な形で山川の文章に出会ったといえる。しかしその誤解は、単純に過去の物語とはいえない。山川が軍部のお先棒を担いだというのは事実誤認だが、巴金の誤解は現代にまで尾をひいている。「第二次大戦前の山川均を論ず」という論文を書いた現代中国のある研究者は、「日本帝国主義の中国侵略戦争に直面して、かれ（山川）は「無産階級と日本軍部が結合した社会革命論」を提起した」と書く始末である。山川の『自伝』の記述を誤解した結果だが、こうした単純ミスがおこるのは、巴金の山川批判が作りだした先入観に引つ張られて、論証より先に結論があるためである。現在の日中関係においても、容易にこうした単純な誤解が生じうることを、われわれは心しなければならぬ。

- (1) 石川禎浩「マルクス主義の伝播と中国共産党の結成」(狭間直樹編『中国国民革命の研究』京都大学人文科学研究所、一九九二年)、同「若き日の施存統——中国共産党創立期の「日本小組」を論じて建党問題におよぶ」(『東洋史研究』第五三卷第二号、一九九四年)、同「施存統と中国共産党」(『東方学報』第六八冊、一九九六年)、同「中国共産党史研究」(岩波書店、二〇〇一年)、三田剛史『蘇る河上肇——近代中国の知の源泉』(藤原書店、二〇〇三年)を参照。とくに石川「施存統と中国共産党」の文末のリストは、山川と施復亮との関係を考えるうえで非常に有益だった。

- (2) 石川禎浩による研究については前注に挙げた。それ以外の代表的な研究を挙げると、平野正「中国革命と中間路線問題」(研

- 文出版、二〇〇〇年)、同『政論家施復亮の半生』(汲古書院、二〇一〇年)、水羽信男「施復亮の「中間派」論とその批判をめぐって」(今永清二編『アジアの地域と社会』勁草書房、一九九四年)、同「施復亮——抗日戦争勝利後の都市中間層と政治文化」(曾田三郎編『中国近代化過程の指導者たち』東方書店、一九九七年)、同「ある中国共産党員と大正期の東京——施存統における日本留学の思想的意味」(曾田三郎編『近代中国と日本——提携と敵対の半世紀』(御茶の水書房、二〇〇一年)、同『中国近代のリベラリズム』(東方書店、二〇〇七年)などがある。また中国人研究者によるものとしては、宋亞文『施復亮政治思想研究 一九一九—一九四九』(人民出版社、二〇〇六年)を参照。
- (3) 石川前掲「施存統と中国共産党」に掲載された著作目録参照
- (4) 石川前掲「若き日の施存統」、「施存統と中国共産党」、「中国共産党成立史」を参照。
- (5) 以下の叙述は、石川前掲「施存統と中国共産党」の付録として収録された外交史料館所蔵資料による。
- (6) 石川前掲「中国共産党成立史研究」三一九頁以下など参照。
- (7) 第一次共産党については、とりあえず犬丸義一「第一次共産党史の研究——増補日本共産党の創立」(青木書店、一九九三年)、黒川伊織『帝国に抗する社会運動——第一次日本共産党の思想と運動』(有志舎、二〇一四年)を参照。
- (8) 石川前掲『中国共産党成立史』の付録3、同書四八五頁以下、なおこの調書は一九二二年の日付なので、二二年時点のことが「昨年」とされている。
- (9) 石川前掲「施存統と中国共産党」三四八頁
- (10) 『続・現代史資料2 社会主義沿革2』みすず書房、一九八六年、九二頁
- (11) 石川前掲「施存統と中国共産党」三四九頁以下
- (12) 同志社大学人文科学研究所編『近藤栄蔵自伝』(ひえい書房、一九七〇年)二一五頁以下、高瀬清『日本共産党創立史話』(青木書店、一九七八年)四頁以下など参照。
- (13) 犬丸前掲『第一次共産党史の研究』一一七頁以下
- (14) 事件やビラの内容については前掲『続・現代史資料2 社会主義沿革2』九〇〜九二頁、一〇九頁、一一八〜一二〇頁参照
- (15) 石川前掲「施存統と中国共産党」二七九頁以下、宋亞文前掲『施復亮政治思想研究』六九頁など参照。
- (16) 石川前掲「施存統と中国共産党」二九五頁

- (17) 平野前掲『政論家施復亮の半生』資料編一四四頁以下を参照。
- (18) 宋亞文前掲『施復亮政治思想研究』八九頁以下参照
- (19) 一九二〇年代の山川の思想の変転については、わたしは別稿「日本型社会民主主義の形成——一九二〇年代前半の山川均——」を発表する予定である。
- (20) 施存統「回復十三年国民党改組の精神」、「目前中国革命問題」（復旦書店、一九二八年）二九頁
- (21) 施存統「對於今後革命的意見」、同上書七頁
- (22) ただし施は一九三〇年に入ると、労働者・農民・都市小ブルジョアの統一戦線という構想は、階級性を無視した議論で誤りだったと自己批判する（「一つの誠実な声明」、平野前掲書資料編一五三頁以下を参照）。
- (23) 秦郁彦『日中戦争史』（復刻新版、河出書房新社、二〇一一年）二二二頁参照
- (24) 山川均の著作の引用は『山川均全集』（勁草書房、一九六六～二〇〇三年）により、巻数と頁数を文中に記す。
- (25) 松本重治『上海時代』（下）（中公文庫、一九八九年）一六八頁以下参照
- (26) 巴金の履歴については、李存光『巴金伝』（北京十月文艺出版社、一九九四年）、同『巴金評伝』（中国社会科学出版社、二〇〇六年）など参照。
- (27) 留法勤工儉学運動については、さしあたり何長工『フランス勤工儉学の回想——中国共産党の一流流』（河田悌一・森時彦訳、岩波新書、一九七六年）を参照。なおフランスにいた周恩来がこの運動について書いた文章として、周恩来（米原謙・申春野共訳）『フランス勤工儉学生の大波乱』（上）（下）、『国際公共政策研究』第五卷第一号、第五卷第二号）がある。
- (28) 巴金というペンネームは、自殺したフランス時代の友人・巴恩波とクロボトキン（克魯泡特金）にちなんだものという。
- (29) 以下の叙述は李存光前掲『巴金評伝』七〇頁以下による。
- (30) 一九三七年第一〇期、ただし前半のみ、後半は第一期だと思われる。前半は「一九三七年一月二八日」、後半は「二月一五日」の日付が付されている。執筆した日付だろう
- (31) 郷鈞「論第二次世界大戦前の山川均」、『社会科学論叢』一九八〇年第三期、一〇七頁